

マイクロプラスチックについて

浜松市内小学校

川崎さん

三年生のとき、私は、浜松市かんきょうせいさく課の「浜名湖プラスチックごみ学習会」に、お父さん、お母さん、お兄さんと一しょにさん加しました。

む人島にわたって、はんにそこに落ちているごみを集めて、どんな種類のゴミがどのくらい落ちているのか調べました。ビニール、たばこのすいがら、つりの仕かけ、つりばり、ロープ、ぬのなど、いろいろな種類のゴミがありました。

そのとき、私が思ったのは、だれも住んでいないのに、ゴミが落ちていているということは、ゴミが海の中を通ってむ人島に着いたのだから、海の中にもゴミがたくさんあるんじゃないかということなんです。

む人島でみつけたゴミの中には、コンビニエンスストアなどではん売されている、おにぎりのふくろが落ちていました。トングで拾おうとしたらバラバラにくずれてしまって、うまく拾えませんでした。

そのとき、ちょうど近くを通りかかった先生が、

「これがマイクロプラスチックになって、海をよこす原因になるんだ

よ。」

と教えてくれました。

マイクロプラスチックという言葉は、小学校の総合のじゅ業で習っていたので、見たこと、聞いたことはありませんでしたが、マイクロプラスチックになっていくと中のプラスチックを見るのは初めてでした。

マイクロプラスチックとは、太陽の光で、どんどんバラバラになってくだけた直径五ミリメートル以下のプラスチックのことです。

総合のじゅ業の中では、海岸のすなを水の中に入れる実験を見ました。すると、すなは全部下にしずんで、すなの中にまざっていたマイクロプラスチックが水面にうかんだのを見て、私はとてもびっくりしました。

どうしてびっくりしたかというと、最初見ときはすなだけだと思っていたからです。

その後、すなの中に私もだいたい大さじ一はいくらのすなをおとしたら、五から七こぐらいのマイクロプラスチックがうかんできました。

そのとき、私はとてもこわくなりました。自ぜんがよごれているのはもちろんですが、プラスチックを魚や他の生き物が食べて最後に人間が食べているのです。

ごみやマイクロプラスチックをみんないやがったりこわがったりし

ますが、一人一人がごみを決められた場所にすてるとうかんだんで、
当たり前のことをすれば、この問題は、ふせげると思います。ごみも
マイクロプラスチックも、もともとは、私たち人間が作り出した物で
す。最後まで感しゃの気持ちとせきじんを持って生活していききたいと
思います。

世界を造り、未来を創る創造

浜松市内中学校

井上さん

「普通」とは何だろう。それは最近の私の最大の疑問である。

二〇一五年にSDGsが採択され、達成目標年である二〇三〇年まで、十年を切った。様々な企業のCMの最後には、SDGsマーク、道行くサラリーマンの胸元にはSDGsバッジ。環境問題をはじめとする世界の問題が明るみになり、数々の問題へと立ち上がる人も多い。問題へ取り組む事が「普通」となってきたのだ。

その影響は、私の学校での学習にも及んでいる。家庭科の授業で、食品ロスを減らすためにできることを市の職員の方にプレゼンテーションをした。クラスで考えたできることは「呼びかけ」が多かった。しかし私は、「呼びかけ」だけでは未来は変わらないのではないかと考えた。そのため、毎年行っている独自の活動を今年も行うことを決めた。今年は、食品ロスという視点から環境問題を考察するために、複数のスーパーに取材を行った。

取材では、各スーパーの取り組みについて探ることができた。あるスーパーでは天候や気温からその日のお客様のニーズを予測して商品の量や種類を決めていた。他のスーパーでは、閉店間近にお惣菜がお

いてあるべきかという悩みについて語って下さった。食品ロスとスーパーの存在意義を問う難しい問題だと感じた。各スーパーに、食品の廃棄率を聞いたところ、平均で0.5五パーセントであることが分かった。金額に換算すると約九千円分であるという結果だった。さらに廃棄するための金額も加算するため、スーパーにとって無駄な出費だと話していた。

つまり、スーパーでは食品ロスを減らすことで利益にもなる、ということが言えるのだ。

では、食品ロスが環境問題につながるのはなぜなのだろうか。それは、食品ロスが出ることで、その処分のために二酸化炭素を排出するからだ。取材でも分かった通り、食品ロスの回収でも、二酸化炭素を排出している。

また、日本の食料自給率は約四割と低い。スーパーに取材に行った際も、よく見ると外国産の食品も目立っていた。外国産の食品が日本にあるということは、輸入に使った船や飛行機によって大量の二酸化炭素が排出されているということだ。

ここで皆さんに質問だ。高額な国産うなぎと低価格の外国産のうなぎがスーパーに並んでいたらどちらを買うだろうか。両者共に、同じ位の美味しさがあるのなら、多くの人が外国産と答えるだろう。浜名

湖といえばうなぎ、と言われる程、かつては栄えていた浜名湖の養殖業だが、最近は養殖場の埋め立てが進み、あまり獲れていない。外国産のうなぎの品質の向上により、浜名湖のウナギの需要が低迷したことも理由の一つだろう。利益を優先させた考え方が環境を悪化させるのだ。

この考え方は、世界的にも言えることだ。地球温暖化の原因の一つであるメタンガスは、主に牛などの家畜のおならやゲップが要因とされている。しかし、肉は人にとって必要不可欠なものである。そこで大豆ミートの開発が進んでいることを知っているだろうか。そして、大豆栽培のために、地球の酸素の四割をもたらしっているとされているアマゾンの森林伐採が進んでいることも同時に知っているだろうか。森林伐採が進むのは、開発途上国の人々の「安くてもいいからお金を得たい」という思いと、先進国の人々の「より安く資源を手に入れたい」という思いによって、発生すると考えられる。その後、結果的には環境を悪化させてしまっているのだと思う。

細かい点まで追求していくと、根本的な間違った考えが見えてきた。私は、利益を求めずに、今を生きる私たちが無理をする形での対策は必要ないと思う。持続可能ではないからだ。

コロナ渦の今は、様々な情報に翻弄され、誰もが闇の中を進んでい

るような状況にある。人と人のつながりが希薄であるがゆえに、常識や普通という感覚が鈍り、今までは違う斬新な考え方が生まれている。この状況でできることは少ないが、逆に捉えると、新しい普通を人々が受け入れやすくなっているとも言えるだろう。今こそ行動を起こすチャンスだと強く感じる。

私の家では基本的に、野菜の皮は剥かない。買い物でも、見切り品を見て、献立を考えている母の姿をよく見る。「今あるものを無駄にせず、大切に使い切ること」を続けていけば、きっと日常になり、普通となるはずだ。

環境を守るための対策が、連鎖的に世界の普通となっていくことで、持続可能な範囲で、対策の浸透が実現されるだろう。

あなたにとって「普通」とは何だろうか。国や企業が環境問題に対して立ち上がり、多くの人が協力している普通、それとも誰もが環境問題を見て見ぬふりをしている普通。あなたは、どのような世界を造りたいだろうか。持続可能な未来を共に創ろう。

家族で取り組む省エネ大作せん

富士宮市内小学校

長倉さん

四年生になって、社会科や白糸学習でアース・キッズチャレンジや富士宮市のゴミの事についてかんきょうの事を学びました。

家の電気・水道・ガスのメーターチェックをして、一週間で使った量から一週間で出た二酸化炭素の量(重さ)を計算して前の週とくらべました。ぼくは、電気とガスをチェックしました。計算すると両方で二十三キログラム、二酸化炭素のはい出量を入らす事ができました。リットルのペットボトルで表すと約六千本分をへらした事になります。部屋の電気をこまめに消す事や、お風呂のシャワーは使う時に出す事や追いたきをしない様に順番にどんどん入る事を作せんを立てて家族で協力して取り組んだ結果でした。

ぼくは、夏休みゴミ集めの手伝いを続けていました。このごろ、ゴミが多くなったと思っていました。夏休み毎日ぼくと大きいおばあちゃんの家ですごします。おぼんもあつて家ですごす人数がふえました。ごはんの支度の回数がふえてゴミも多くなって、ゴミ出し日はゴミが重くなって大変だとおばあちゃんが話していました。これは、また作せんを立てないといけないと思いました。まずゴミのチェックをし

した。とうもろこしのしんがとくに重くさせていました。あとは、たまごやトマトなどのパッケージがかさばっていました。ときどき、トイレットペーパーのしんや空箱などざつ紙としてリサイクルできる物も入っていました。ビンやカンやペットボトルなどを分別する習かんはついていけるけれど、ざつ紙の分別ができていないなと思いました。そこで、もえるゴミと別にざつ紙入れのゴミ箱をおく事にしました。家族が分かるように「ティッシュ空箱」「トイレットペーパーのしん」「ふうとつ」「紙」などと書いておきました。そうすると、意外とざつ紙が多くありました。家族みんな得意きしてゴミを分別する事ができました。

せいそうセンターでもやすゴミがふえると、機械を動かすための電気やねん料代が高くなります。回しゅう車の台数もふえます。そうなると、二酸化炭素量がふえて地球温だん化のげんいんとなります。

地球のかんきょうを守るために、取り組み方を家族で話し合いました。食べ物大切にすること、リサイクルできる物を分別すること、物をゆずり合って使う事、買う時に本当に今ひとつよいかどうか考えて買うようにすることです。一人一人が得意きして、今できる事から続けて行動する事が大切だと感じました。

おばあちゃんが週二回ごみを出す時に、少し軽くなって楽になった

とよろこびました。

楽しく無理なくエコ活動

焼津市内小学校

小澤さん

私の家の前にゴミの集積場があります。ゴミの日にはふたが閉まらないほどゴミがあふれ返っています。これ以上ゴミがふえてしまうと地球温暖化にもつながってしまうのです。自分の家庭から気をつけようと思いました。

まずは、ふだんから気をつけていることから紹介します。

例えば、ペットボトル、トナー、プラスチックをリサイクルすることやえん筆や消しゴムを最後まで使いきることに、エコバッグを持参することとご飯、給食を食べ残さないことなどを気をつけています。

次に楽しみながら実践していることを紹介します。

1つ目は、野菜の皮をすてずに使って料理しました。大根の皮とにんじんの皮を使ってきんぴらを作りました。家族のみんながとてもおいしいと言ってくれました。これからも野菜の皮はなるべく使い切ろうと思いました。

2つ目は、野菜の再生栽培をしました。よく使うねぎは、根っこの部分を水につけて再生しました。ねぎの成長は早くて1週間では約17センチのびました。

3つ目は、小さくなって着れなくなった私の服でお人形さんの洋服を作りました。着れなくなった服をすてるのはもったいないのでお人形さんの服を作りました。

4つ目は、はぎれを使って富士山の切り絵やカバン、コースターを作りました。家にはたくさんのはぎれがあったので使えるものに変身させたくて作りました。何かを買わずに作れることは、とてもいいことだと思いました。

5つ目は、おかしの空きびんと毛糸を使って花びんを作りました。

花びんを買わずにすんだし、本当はすてるはずだったおかしの空きびんをすてずにすみました。他にも色や形のちがうびんをたくさん作りました。

6つ目は、海で拾ったシーグラスとペットボトルを使ってランプを作りました。海もそうじできたし、ペットボトルも再利用できました。そして私と家族の心がいやされました。きれいなランプが作れてうれしかったです。

結果は、週二回燃える日のゴミの収集日に1ぶくろずつ出していたけど意識してから1週間に1ぶくろの量になりました。1ヶ月で4ぶくろ分へりました。

意識するとこんなにゴミが入ることにびっくりしました。毎日でき

ることは、継続していき、楽しみながらゴミをへらすためには、他に
どんな工夫があるのか考えていきたいです。そしてもっとゴミをへら
していきたいです。この工夫をたくさんの人に広めていけば必ずゴミ
がへっていくと思います。そして地球がきれいになると思います。1
人1人が気をつけていけば未来はきっと明るくなると思います。

浜松市内小学校

竹村さん

今年の夏も暑い。熱中症警戒アラートが何度も発表され、長い夏休みなのに暑すぎて日中外で遊ぶことも親に反対されることがある。

ぼくがこの作文を書くとき知って母が今朝の新聞の記事を教えてください。だ。

「世界の平均気温の上昇幅が二〇四〇年までに一・五度を超える可能性が高く、今までの分析より十年早まった。」

という内容だった。それはよく聞く地球温暖化が原因なのだろう。二十年間で一・五度ということは、ぼくがおじいちゃんになるころにはいったいどうなってしまうのだろう。百年も千年も先の話ではなく、ぼくがまだ生きている時代の話だ。ただ暑さにたえるだけではなく、農業に支障が出たり、台風が巨大化して大きな被害にあうかもしれない。

ぼくはまだ子供だ。そんな子供のぼくにも何かできることがあるか考えてみた。発電のために化石燃料を燃やすと二酸化炭素が発生し、地球温暖化につながるといわれているので、まずは節電や省エネが必要だ。

「また電気つけっぱなし。」

「あ、ごめん。」

うちでよくある会話だ。ぼくは昼間暗くもないのに階段や洗面所の電気をつけてしまうくせがある。そして、明るさがあまり変わらないので消し忘れてしまう。これは今すぐにでもやめようとおもう。

次にエアコンの使用だ。この暑さでエアコンを使用しないのは辛すぎる。でも、せん風機を使えば二十八度でも快適に過ごすことができる。

テレビも、ぼくはひまになると特に見たい番組がなくても何となくテレビをつけてしまう。それを気をつけることはすべくでもできそうだ。

他にも、シャワーを流しっぱなしにしないこと、買い物に行く時は必ずエコバッグを持っていくなど小学生のぼくにもできることはたくさんある。

ぼく一人が頑張ってもきつと何も変わらない。でも、日本全国の小学生が少し気をつけたらどうだろう。全世界の小学生が気をつけたらどうだろう。そんなぼく達が大人になったらもっとたくさんの方ができるようになるはずだ。そうすれば、きつとぼくがおじいちゃんになった世界は何かが変わっているはずだ。

学校でSDGsについて調べる授業があった。地球温暖化だけでなく、他にも多くの問題があることを学んだ。

「ほく一人くらいやらなくていいから変わらない」のではなく、一人一人が自分自身の近い将来の問題として考えることが大切だと思う。

静波海岸からの手紙

島田市内中学校

大石さん

今年は昨年延期になった東京オリンピック2020がついに開幕した。日本選手団は怒涛のメダルラッシュを見せ、過去最多のメダル数となった。7月にオリンピックの事前合宿に来るアメリカ選手団を迎えるため練習会場となる静浜海岸では牧之原市主催のビーチクリーン大作戦が行われた。僕はこのビーチクリーンにボランティアとして参加して驚いた。海岸にはたくさん流木や、石、ごみがあちらこちらに広がっていたのだ。ごみは、様々な種類があった。結局、総勢約200人が1時間で拾った流木、石、ごみの量は軽トラック2台分にも及んだ。

僕は愛着のある地元の静波海岸をきれいにすることが出来てすっきりした気持ちになったが、「なぜ、こんなにも海岸にごみが落ちていくのだろうか?」と疑問に思った。静波海岸は夏の時期、海水浴場としてたくさん観光客やサーファーが訪れる場所である。大勢の人が使う場所にごみが落ちていると不快になるし、海の汚染にもつながる。僕は夏休みの数日間、親と一緒に静波海岸のビーチクリーン活動をすることにした。一回の活動は朝の三十分程度で、ごみの種類は、たば

この吸い殻など、この前のビーチクリーンと同じようなごみや、海水浴場が解放されたことでビーチサンダルやゴーグル、砂遊びで使うもちゃなど、この時期ならではのゴミもあり、全体的にごみが以前より増えたような気がした。ごみの中ではたばこの吸い殻が特に多く、小さいので見逃しやすいし、空き缶の中に入っていることもあり、分別がとて大変だった。インターネットで調べてみると、海岸を汚染するゴミのうち最も多いのがたばこの吸い殻だという記事を見つけた。たばこの吸い殻は海でポイ捨てされたもの以外ほとんどが、街でポイ捨てされ下水から河川を通ってきたものだということ、有毒なニコチンが入っていたり、自然で分解されるまで最長十三年もかかるプラスチック製のフィルターなど自然環境に影響を与えるものが入っていることなどを知った。

また、あるビーチクリーンの日、日本に台風が近づいている影響で風が強く、波も荒かった。そんな中いつも通りごみを拾っていると見慣れない一つのペットボトルを見つけた。そのペットボトルのラベルをみると、原産地が台湾と書いてあり、周りには漂流や流木に付着して生息する「エボシ貝」が付いていた。家に帰り調べてみると、このペットボトルはやはり「蘋果西打」という台湾で人気のアップルサイダーだった。海に捨てられたごみの流れ方についても調べてみると、

日本の太平洋側の海岸に漂着したごみは黒潮に乗ってくるものが多いことを知った。今回発見したペットボトルも台湾から長い月日をかけてこの静波海岸に漂着したのだろう。このように海に出てしまったごみは海外にまで影響をもたらしてしまうということが分かった。最近のニュースや記事では、海に流されたプラスチックは自然に分解されにくく、ペットボトルだと四百年もかかることやマイクロプラスチックとなり、海の生き物にも危害を与えてしまうということがよく報じられている。今回の活動を通して静波海岸の現状を知ることができはでなく、海洋問題についても改めて確認ができた。

「めんどくさい」「周りもやってる」という小さな気持ちから始まったポイ捨てという行為で、その場所を汚すだけでなく、海外の人たちや海に住んでいる生物にまで危害を加えてしまうかもしれない。このようなことを一人一人が頭の片隅に入れながら責任をもって行動しなければならぬと思う。その一人一人の行動がたとえ小さくてもやがて必ず未来に繋がると思う。この作文に書いたことは世界の三十億分の一ぐらいの人にしか伝わらないかもしれないが僕自身が率先して行動することが大切だと思う。僕には具体的に何が出来るだろうか？ごみをすべてゼロにすることはできない。でも減らすことなら出来るかもしれない。例えば、コンビニやスーパーではマイバッグを持参した

り割りばしをもらわないようにするReduce、自分が着られなくなった服はいとこに回すReuse、買い物に行ったときはエコマーケの付いたものを選んで買うRecycleなどR活動を実践したい。また、これからも休日などはゴミ拾いに行くことを続けることも良いと思う。僕の行動でごみを減らすことが出来たらそれ以上に嬉しいことはないし、その行動でほかの人にも影響を与えることができたらもっと減らすことが出来るはずだ！この繰り返しで、いつか僕の大好きな静波海岸のごみはなくなるかもしれない。そう思うと、ワクワクしてきました。そうだ、また明日も静波海岸に行ってビーチクリーンをしよう！

食品ロスを減らすために

静岡市内中学校

山下さん

私は食べることが大好きだ。好きというより、お腹が減ってしまうのかもしれない。今日もいつものように、三時間目から給食が待ち遠しかった。ご飯を多く入れてもらい、野菜も増やした。けれど、牛乳は飲まなかった。別に大した理由がある訳でもないのに、たまに牛乳がいくつも余っていて、「この牛乳はどうなるのだろう、全て、捨てられてしまうのかな。」などと思う。この日は牛乳、ご飯もたくさん余っていた。とてももったいない気がして、「減らさなくても良かったのに。」と後で後悔した。

学校の給食では、毎日多くの食品ロスが出ている。食品ロスとは、食べられるのに捨ててしまう食品のことを指し、日本では年間約六百万トンもの食品ロスが出ているそうだ。これは、世界の飢餓に苦しむ人々に向けた食糧援助量、約三百二十万トンを上回る。

こんな日本の食品ロスの大きな原因の一つが、学校の給食だ。給食の食品ロスは、年間で児童一人あたり、約十七キログラムと言われている。では、なぜ給食でこんなに多くの食品ロスが出ているのだろうか。なぜ食べ残してしまうのだろうか。

私は、給食の食べ残しの理由が四つあると考える。一つ目は、個人によって食べる量が違うということだ。私の学校ではいつもご飯やパンなどの、主食が残ってしまう。これは、多く食べられる人もいれば、あまり食べられない人もいるからではないか。小食の人がみんなと同じ普通の量を食べるのは、無理だと私は思う。無理して食べても良いこととは言えない。また、炭水化物を控える人もいる。なので、それぞれ個人によって量を調節すれば良いのではないかと考える。食パンは、どの人が何枚食べるのか、それによって各クラスの枚数を調節したら良いと思う。

二つ目は、時間があまりないことだ。準備や片付けなどもあるので、どうしても給食を食べる時間が短くなってしまふ。そうになると、十五分程度で給食を食べなければいけなくなり、食べきれない人や、増やそうと思ったけれど時間がなくなる人が出てくる。さらに一つ目の理由にもあった通り、量が多いとなおさらだ。これらのことから、より食べ残しが多くなってしまふのではないかと考えられる。給食の時間を、数分延ばすことで食品ロスが減る可能性があるかと、私は思う。

三つ目は、好き嫌いがあるといふことだ。好きなもの、嫌いなものがあるのは、仕方がない。でも、食べるきっかけを作らなければいけないと私は思う。例えば、いつも余ってしまう牛乳。牛乳は、牛の親

の血からできていて、本当は、子を育てるために大切な乳なのだが、私たちが飲んでいて、それなのにも関わらず、私たちは牛乳を捨ててしまっている。このことを知ったら、少しは「捨てるのはもったいないから飲んでみようかな」と、思い始める児童も出てくるかもしれない。肉や魚などの動物、野菜や果物といった植物の一つ一つに命があると思えば、嫌いな食べ物にも挑戦できるかもしれない。このように、学校で食べ物の命について話すことで、食べ残しをしないという意識が高まると思う。

四つ目は、三つ目の理由に似て、食べる人の気持ちだ。みんな、何も考えずにただ捨てている。でも、そこまでにどれだけ苦勞・時間・思いがあるのか分かっているのだろうか。私の祖父は畑をやっている。毎月大きなダンボールにたくさん採れた野菜をいれて、とても大事に、うれしそうに送ってくる。「毎日時間をかけて、しっかり管理しているんだな」と思うと、大変さが伝わってくるような気がする。中には、傷ついている物もある。しかし、スーパーの見た目がきれいな野菜より、ずっとおいしいと私は思う。私の祖父だけでなく、色々な生産者が一生懸命育てた野菜、思いのつまった畜産品を食品ロスとして捨てる。それが消費者が生産者に送るメッセージなのだろうか。食品ロスゼロは難しいと私は考える。しかし、消費者が生産者の思いも考え、

食品ロスを減らすという意識を持つことが、大切であると思う。

今開催されている東京オリンピック。閉会式で、四千食の弁当が廃棄されたと大きな問題として、取り上げられていた。世界では現在、「持続可能な開発目標」SDGsが、課題となっており、これに反する行為としてこの五輪で問題となった。また、二酸化炭素軽減のために電気自動車の開発を、トヨタやホンダ等が急いでいる。これからの世界、そして社会は、「環境」を守っていくことが大きなテーマであり、それがビジネスチャンスにもなるだろう。

今回、私が考えた食品ロスは小学生でも身近で、改善に向け考え、取り組める環境対策の一つだ。私は、この問題をみんなと共有し、できることから少しずつ、始めていきたいと思う。

持続可能な世界をつくるために

静岡市内中学校

田中さん

私は中学校で生徒会に入っています。生徒会では毎週ペットボトルキャップの回収を行っています。毎週大量に集められるペットボトルキャップを見て、キャップの回収を呼びかけることは、ペットボトルの使用を推進していることになるのではないかと疑問を持つようになりました。ペットボトルキャップの回収は本当に環境に良いのでしょうか。

この活動の目的は、ペットボトルキャップを回収してワクチンに変換し、発展途上国の子供達を救うためです。もともとは燃えるゴミとして処分していたペットボトルキャップをリサイクル資源として企業に売り、そのお金でワクチンを買ひ、子供達を救う。リサイクルもできて、なおかつ子供達の命救う事もできて一石二鳥だと思うかもしれませんが。

日本では、ペットボトルを一年間で二四五億本、一人当たりにすると一九四本消費(二〇一九年度、PETボトルリサイクル年次報告書二〇二〇より)していることとなります。ということはペットボトルキャップもその分消費していることとなります。それだけのペットボ

トルキャップを、燃えるゴミとして処分してしまうよりは回収してワクチンに変えた方が資源の有効活用につながるでしょう。しかし、たくさん集めれば良いというわけではないと思います。たくさん集めるには、一人一人がたくさんのペットボトル飲料を消費しなければ成りません。それではペットボトルを使うことを勧めることにもなり、環境に良くないのではないのでしょうか。今世界的に海洋プラスチックゴミが問題となっています。ペットボトルをはじめとした大量のプラスチックゴミが海に流れこみ、海の生態系に甚大な影響を与えています。そうした中でさらにペットボトルの使用量が増えれば、今後海洋プラスチックゴミの問題はさらに深刻になってしまいうでしょう。

また、ワクチンの観点に目を向けてみましょう。現在一般的には四〇〇個のペットボトルキャップで一キログラムになり、一キログラムあたりの金額は一五円とされています。ワクチンは種類によって必要な金額が異なるのですが、例えばポリオワクチンを一個購入するのに必要なキャップの個数は五三三個、また、はしかのワクチンの場合は二五三三個集めなければなりません。五〇〇ミリリットルのペットボトル飲料を二二〇円と仮定すると、五三三本のペットボトル飲料を買うには六三九六〇円、二五三三本買った場合は三〇三九六〇円かかります。そして集めたペットボトルキャップを運営団体に送るには輸送料金が

かかります。ワクチンを一個作るには、ポリオワクチンの場合は約二〇円、はしかのワクチンの場合は約九五円かかります。ペットボトルキャップを集めてワクチンを作るよりも、ペットボトル飲料を買うのを我慢して、そのお金を寄付した方がより多くの人を救うことができます。

小学生の時もペットボトルキャップの回収を学校で行っていて、たくさんキャップを集められた時はすごく嬉しかったことを覚えています。当時私は、集めることで人助けにつながるのだから、たくさん集めなければと思っていました。しかし、この事実を知り衝撃を受けました。ペットボトル飲料一本を買うお金、一〇〇円を我慢して寄付すればポリオワクチンとはしかのワクチンを一本ずつ買うことができるのです。それにペットボトルを使わないことで環境の保全にもつながります。ペットボトルの使用量が減り、みんながマイボトルを持ち歩くようになったら、海洋プラスチックゴミの問題の解決にもつながるかもしれませんし、ペットボトル飲料を買うために使っていたお金を寄付にまわすこともできます。ペットボトル飲料を買って、キャップをリサイクルしワクチンを買うのと、どちらが良いと言えるでしょうか。

今、世界では持続可能な開発目標SDGsというものを掲げて、よ

り良い世界を目指して様々な取り組みが行われています。そうした中でペットボトルキャップの回収について考えることは、SDGsの三番「すべての人に健康と福祉を」や「四番」海の豊かさを守ろう」というものにつながっていくのではないのでしょうか。

ペットボトルキャップの回収について呼びかけたり実際に回収を行っている生徒会という立場からすると、たくさん集まった時は達成感を感じます。ただ捨ててしまうだけのものを回収して、別のものに変えたり役立てたりすることは良いことかもしれませんが、自分達の活動に疑問を持ったことで、それが最善の策ではないということに気づきました。当たり前だと思っていることでも一度立ち止まって考え直すことで、新たな一面や視点に気づくことができるかもしれません。一人一人が日々の行動を見つめ直し、より良い方法はないかと追求することは、持続可能なより良い世界をつくるための一歩になると思います。私自身も周りに目を向け、自分ができることを探していきたいです。